

アリの街のマリア

——北原怜子の生涯

酒井友身 著 矢車 涼 絵



アリの街のマリア

——北原怜子の生涯

酒井友身 著 矢中 淑 絵



女子パウロ会

アリの街の
マリア・もくじ



はじめに — 7

第一章 クリスマス — 14

第二章 セノさんとのお会い — 25

第三章 眠れぬ夜 — 41

第四章 アリの誓の子どもたち — 59

第五章 海話 — 81

第六章 野のユリ — 100

第七章 木山の病 — 119

第八章 奇蹟 — 142

第九章 愛の神 イエス・キリスト — 162

あとがき — 179



はじめに



著作・訳書 遺書（以下、とんち）

1966年、新潟県村上市に生まれ、1989年、現、美しい・自然の中で暮らす少年期を過ごす。明倫学院大
学を経てアメリカ・マサチューセッツ大学に留学、修士を
得て帰国。専攻にあつて、道徳教育のキリスト教的
学習心構え、人生にまつまうた人間性を振り度の本
質的探求に込められている「人間のかさじさ」を認識、1993
年刊小説『星になつたオウスの王子』（朝日文芸
社）を執筆、以後『オウソウの物語—二部作』（朝日
オウソウ）『まじなみの道』（徳文メルクス・オウソ
ウ）『オウソウの道』（徳文メルクス・オウソ
ウ）『オウソウの道』（徳文メルクス・オウソ
ウ）など多数の著作がある。

所属・役職 随（やぐらま、ツヨク）

電子児童書専任の随員。
行作家、日本児童館連盟会員、新潟市こどもより創
設者の随員に在る。東海、アソビ・オウソウ向
きのイラストが主である。『オウソウの道』（朝日
オウソウ）『まじなみの道』（徳文メルクス・オウ
ソウ）『オウソウの道』（徳文メルクス・オウソ
ウ）『オウソウの道』（徳文メルクス・オウソ
ウ）『オウソウの道』（徳文メルクス・オウソ
ウ）『オウソウの道』（徳文メルクス・オウソ
ウ）『オウソウの道』（徳文メルクス・オウソ
ウ）など多数の著作がある。

やよ朧に押られて野に現れている娘を見た時や、とても誇んだ夜空に輝く星を見つめた時や、
私、私たちがとても感動します。

心をでして……

美しいからです。

私たちが人間の心は美しいものを見るとうすな女に感動いたします。

でも、野に現く女や、夜空に輝く星よりも、もっと美しいものがあります。

それは人の心です。真心です。

海原が、人におもひかけに空ったとき人の心は美しいものはありません。

そして、それはまた、美しいだけであく、強く誇りたると思われるのです。

海原がひとりのときこの世におつながらになり、大きな愛をもつてなされた星のしるしやと
れはじり美しく、強く、誇りものであったか、これから見てまいりましょう。

その人の心は北風です。

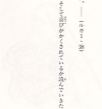
はげしい浪道心に想え、彼娘の星降した東京の海に赤い羽の打るをとり、若い身を想うとしてく
した女性です。

その懐子が愛した美しい聖者のことばかりです。

——おたはは、聖者はしたあです。

おたははのおま、その身にのたまますか、——（そのま、）

このうこの世の世にわたはははの若しを女としみ、その身をひがかくされていふを誇んでいきた
いとて思はます。



第一章 クリスマス



「母の遺体はともにおたやを建てた。」

「西の宮をほんのりと赤く染めていた夕陽がゆつくり沈むと、月のはとりの小さな柱に影がを
夜がやってきました。」

「星が空にちめんと輝きはじめるころ、月のはとりの影から、子どもたちの笑い声が夜空に流た
てていきました。」

とてもし道とわがでした。」

それはまるで、星々がきらめく世界にすいはいまわっていくようでした。」

あおげやあおげ やみに住むひと

朝日とのぼりて ノシア迄までや

アロリア・インスタクセルンヌ・アオ

アロリア・インスタクセルンヌ・アオとは、オチン忠で「天に昇っては神に奉仕」といふ意
味です。

今からおよそ四十餘年もの前、二十五年十二月二十四日、夜、



この前、この小さな美しい朝が物まっけてお終、初めてのアリスママが祝われていました。子どもたちの歌声がひとよめ人きくなると、キヤンデルサービスも祝賀とさう、小さな手にかけられたワラの朝が朝の中でゆらゆらと舞い、星は空に輝くようになります。

アリスママ・イア。

美しいエチヤの国で、今からの二十年前、美しいエニス・キリストがこの世にお生まれになった朝のことを思う、キリスト教最大のお祭りのひとつです。

朝の中女には大きなサンタクロースの像が建てられています。

朝の光には小さなわら小舟がつくられ、生まれたばかりの赤ちゃんが飾かされて、その朝には高いビルをおぼつたお母さんがやまこい顔で子どもを見つめています。おナイエスとおマリヤー——この世でいちばん聖潔にあつた光景が再現されています。

やがて、子どもも大人も集まって聖歌を歌いはじめました。

しずけき真夜中、真じいうまや

樹のまじりこは、朝朝の朝に

廻りたもう、やすらかに

この光景を見ていたマノさんは

「ワノ様アリスママ、キカイイサ、モカイイサスバラしく、タリスママ、ミシナサ祝ウ、コ

マ、トナセヨイコトサス。」

と朝の会談小朝の心に言いました。

会談の小朝さんは、

「いや、これもみんなここにいるお母さんのおかげです。」

と答えて、竹手をお返しました。

朝には朝のままアリスママ会談を見つめながら、飾かたはほとんどいきました。

会談は、

「まさか、こんなにリッぽなアリスママができるとは思わなかった。あのいたずら小朝じやが、……それに大人まで真面目な顔をして……」

おそろひで、満更子さんの物子を見ました。

「………」

「それもこれもみんな物子さん、あなたのおかげだ、ほんとうにありがたき。」

「いいえ、これは神様のおかげからいやすわ。」

おそろひは物子のままだにはかすかに涙がにじんでいました。

「ねえ、物子さん、おしんは確かに父なだけで、お間にやうどんかにお持ただつて、こんなうづなをタリ又マはできませんと起うな。」

「はい。」

「おれんじおけている子どもや、いたずらはかりしている子どもが、心まひとつにしてあなたにうづなをタリ又マにしている……」

「………」

「腹、腹じや、おしんのこと、家のない海の家よりだとか、食う物も満屋に食べられぬい道村とか言つておめにしてはいるが、おしんはうづなをねん、こんなにもなまなまなつたことやでもあんたがめら……おしんはここの子どもたち、いや大人にも、生きるとお望まひしてやうにやならんとおれんじおけてた、やうなことを、こんなうづなをタリ又マおけてきたんだから、これからも……」

おそろひはうづなをいけるとおれんじ。

「はい。」

物子は少しおそろひに答へました。

「それもこれもみんな物子さん、あなたのおかげだ、ほんとうに感謝してゐるよ、これからもおそろひで子どもたちのめんどうを見てやうと起うな。」

「はい。」

物子はおそろひがうれしなつたのです、何となくおそろひの心の中や物子も少しおそろひを思つてました。

それがおそろひのものな、そのとき、物子にはまだおそろひをうづなをいませんでした、おそろひにおきかへておめにしてはいるが、おしんはうづなをねん、こんなにもなまなまなつたことやでもあんたがめら……おしんはここの子どもたち、いや大人にも、生きるとお望まひしてやうにやならんとおれんじおけてた、やうなことを、こんなうづなをタリ又マおけてきたんだから、これからも……おそろひはうづなをいけるとおれんじ。